

事業所名： グループホーム 満天 (2号館)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0373100460		
法人名	社会福祉法人慈恵会		
事業所名	グループホーム 満天 (2号館)		
所在地	〒028-7906 岩手県九戸郡洋野町中野第3地割38番地189		
自己評価作成日	令和7年11月1日	評価結果市町村受理日	令和8年1月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「あなたのままで 心のままに のびやかに」の理念を常に意識しながら、認知症であっても穏やかに安全に生活出来るようなサービスの提供を心掛けている。また、グループホームらしい明るく家庭的な雰囲気大切に、それぞれの利用者が役割を持ちながら、「その人らしく生活出来る場」を提供できるよう配慮している。毎月、職員手書きの手紙をご家族へ送付し、日々の様子や出来事などを報告。ご家族からは、いまだ手書きの手紙なんていただく事なんて無い、温かみがあってうれしい、というお言葉を頂いている。ご家族との信頼関係も大切に、一緒に支える身としてご協力いただけている。話しやすい関係づくりにも努めている。最近では、外出する機会も増えてきており、季節のドライブや外食等の行事も実施している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は2ユニットを運営しており、隣接する介護老人保健施設と連携することで食事の提供、訪問看護及び理学療法士の医療的対応、災害時の避難場所を確保している。職員間の話し合いをもとに決めた、開設時の理念「あなたのままで 心のままに のびやかに」を念頭に置き、より具体的な年度目標を設定して、日々利用者の尊厳に配慮した意向の実現と手厚いケアに努めている。毎月職員が手書きの手紙と写真を添えて家族へ生活状況を報告する取り組みは、家族からの信頼と感謝で受け止められている。また、地域独自の防災支援団体とのつながりは、災害対策に高い意識があることが伺える。コロナ禍の制限も徐々に緩和され、積極的に外出先を拡大している。利用者一人ひとりに時間をかけることを大切にされたケアが実践されており、利用者の生活の更なる充実が見込まれる。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年11月21日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている(参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらい 3. 職員の1/3くらい 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている(参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらい 3. 家族等の1/3くらい 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない				

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	理念を意識し認知症があってもなるべくその人らしく穏やかに過ごしてもらえるように心掛けている。	職員間で話し合っ決めて開設当時の理念「あなたのままで、心のままに、のびやかに」を事務所内に掲示し、職員は常に念頭に置いてケアにあたっている。理念をもとにした年度目標は、毎月行う職員会議において設定し、今年度は①感染症対策の徹底、②活動性の向上、③地域との連携の強化、を具体のものとして取り組んでいる。勉強会等で理念を確認しているほか新人職員には都度理念を伝えて意識付けを促している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	運営す新会議、避難訓練、お祭り等に参加していただき、交流できる機会をもうけている。	コロナ禍以降交流が減っている中、昨年から同一法人の介護老人保健施設の行事において、利用者も参加し地域交流が行えている。以前行っていた事業所敷地内での夏祭り、認知症カフェの活動は未だ行っていないが、委員会において再開に向けた前向きな話し合いを行っている。どちらも地域の参加者をどのように募るかが課題となっている。新たに地域独自の団体「防災支援隊」に声掛けし、災害時の避難誘導、見守りへの助力を得られている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	以前は、認知症カフェ等おこなっており、地域の方々に知っていただけるようにしていたが、コロナ禍の為、今はおこなっていない。今年度は開催する予定。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議では、今の状況などを報告し、出席者から意見をいただき、職員全員が報告書を見る事でサービス向上に活かしている。	会議には利用者家族、地域包括支援センター、民生委員、中野南地区会長などで構成され参集型で開催している。避難訓練を兼ねた会議では消防署及び防災支援隊の参加もあり、意見交換が行われた。	運営推進会議の議事録はとても詳細にまとめられていることから、小中学校長や駐在所の警察官などへも可能な範囲で配布するなどして情報を発信し、新たな構成員の模索と、地域から関心を向けられる工夫がされることを期待します。

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	地域包括支援センターの方や、民生委員の方に運営推進会議に出席していただき、状況を伝え協力関係を築くようにしている。	地域包括支援センターとは運営推進会議への参加を含め、日頃から利用者の相談等で頻りにやり取りがされている。町立病院の医療連携室の相談員とも同様である。そのほか、生活保護のケースワーカー、社会福祉協議会の成年後見センターとの連携が取れており地域の関係機関との協力も良好である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	年に2回以上、勉強会を実施し、具体的な行為について確認し、身体拘束にならないように意識している。	「身体的拘束等の適正化のための指針」を定め、2ヵ月ごとの運営推進会議と併せて身体拘束適正化委員会が開催されている。同委員会は、運営推進会議の委員で構成されており、行政をはじめ第三者の視点が反映される体制になっている。年に1、2回職員研修を行っているほか、日頃から身体拘束になり得るかを職員間で確認し話し合われている。スピーチロックについては、利用者に対して指示的ではなく、伺いを立てる聞き方や地元の方言で声掛けするなど、意識している。また、接し方や視線の高さなどにも配慮し、認知症の理解を深めながら取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	高齢者介護にとって、虐待は絶対にあってはならないこととし、年2回の勉強会で常に啓発を図り、周知徹底されている。また、入浴時に全身状態の観察をおこなっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	成年後見人制度を利用している利用者様もおられるが、権利擁護に関する制度について勉強会などは開催していないため、今後、学ぶ機会を持つたらと思う。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	十分な説明をして、理解を得られた上で同意書を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	運営推進会議にご家族を呼んで意見や要望を聞き、反映させている。	運営推進会議には、毎回違う家族に出席依頼をしているが、都合がつかず来られない家族も多い。ケアプランの説明は、近隣の家族へは来訪を促す手紙を書くなどして面会を兼ねて来てもらうよう工夫している。毎月、家族に手書きの手紙と写真を添え、日頃の生活の様子等を伝えており、この手書きの手紙は家族から好評を得ている。また、オンライン面会や電話等を通じて意見を伺っている。利用者本人ができることをさせてほしいとの要望に応じた結果を報告している。要望に沿い、事業所としてはエアコンの設置を検討したい、としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	管理者は職員の意見を聞いて下さり、反映させている。	毎月職員会議とカンファレンスを行い、ユニット会議は必要時に不定期開催としている。職員からケア方法の提案があった場合、まず実践し、結果をもって改善していく考え方でニーズを反映させている。職員との個別面談については、そのために職員が活用できるシートを作成したところであるが、面談へのシート活用及び面談実施には至っていない。	職員との個人面談は、事業所全体のモチベーション向上につながるものと考えられることから、面談時間や実施時期などの工夫を加えつつ、順次取り組みを進めていくよう期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	勤務状況を把握し、有給休暇や休日を取れるようにしてくれる。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	常に声掛けし取り組まれている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	なかなか時間が取れていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	利用者様から聞いた事をケア記録に残し、職員間で周知できるよう口頭でも伝え、利用者様が安心して過ごせるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居時・面会時など、なるべくゆっくりとご家族とお話をし、ご家族の不安や要望等聞き、信頼関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	サマリーなどと照らし合わせ、ご家族とご本人が何を必要としているかを見極め、どのようなサービスが必要なのかを考えるようにしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	家事を一緒におこなったり、会話の中から利用者様の過去の経験を引き出す事で生活の知恵を学ぶことが多くある。利用者様との日常を共に過ごしながら共に育ち合う関係を築けるよう努力している。家事をしていただいた時には、「助かりました。」と感謝の言葉を伝えるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	認知症が進行し、ご家族の事が分かりにくくなって、ご家族の事を思って行動している様子や、言葉が聞かれた時は、面会時に伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	ご本人が話していた思い出がある人や場所等、希望があればお連れしたり、電話希望があれば話せるように支援している。	コロナ禍以降、オンラインやLINEアプリを用いた会話は新たなツールとして活用が続いている。家族以外の面会者も少しずつ増えている。2ヵ月おきに馴染みの床屋が訪問したり、近所の商店から化粧品を購入することもある。入居時に地域とのつながりを事前に聞いており馴染みを把握するよう努めている。墓参りや、気ままにドライブに出かけ思い出の場所をめぐっている。車イス利用者が5、6名ほどいるが、法人内の介護老人保健施設の送迎車を借用し、外出支援に積極的に応じている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者様同士の関係を把握し、同じテーブルで過ごしていただいている。いつも顔を合わせていると、困っている時などお互いに声掛けしてくれている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	サービス終了しても、ご本人やご家族にあった時等は声掛けし、話しやすいように心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の生活の中で聞いた意向は記録に残し、日誌に転記して共有し、実現に努めている。また、申し送りやカンファレンスで検討している。	利用者のほぼ全員が、言葉で意向を伝えられる。難聴者は、仕草や行動からも推察して筆談を用いて対応している。男性の利用者も4名おり、口数が少ない方の意向把握は難しいが、家族から生活歴の情報をもらう等により概ねの意向を汲んでいる。塗り絵や編み物を趣味とする方、モップで床を掃除してくれる方等、事業所の手伝いをしてくれる利用者があり、役割としてお願いしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	利用者様の今までの生活歴や使い慣れたものを持参していただき、出来るだけこれまでの生活パターンを崩さないように心掛けている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	出来ること、出来ないことを見極め、心の状態を観察しながら、今出来ることの把握に努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	ケアプラン作成時、職員カンファレンスをし、今何が必要なのか話し合い、ご家族に説明し、意見を聞きながら作成している。	入居当初のプランは、ケアマネジャーが作成、その後は各居室の担当が見直し、プランの評価及び原案を作成のうえ、カンファレンスにて職員からの意見をもらう。ケアマネジャーは、それらの意見を集約しプランを作成する流れである。家族には、直接又は郵送にて意見をもらい修正している。ケアプランの様式には、家族の意向を伺う欄が設けられている。その意向欄が未記入の場合もあるが、家族への説明と同意を得て、ケアプラン確定としている。ケアプランは職員全員が確認し押印することで共有を図っている。ケアプランは、短期3か月、長期6か月から1年で見直している。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	日々の様子の違いや、ケアの実践の結果、工夫など個別に記録、共有し、より良いケアに繋がるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	職員間で常に情報共有し合いながら、ケア記録を見直すなどし、その時必要なサービスは何なのか見極め、サービス内容の変更などしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	その方が今できることを把握し、自分らしく生活できるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	ご本人やご家族の希望を大切に、主治医との関係を築けるように意識しながらおこない、医師の言葉の意味を考えながらケアを心掛けている。	協力医療機関は近隣にあるが、入居前からのかかりつけ医をあまり変えないように対応をしている。家族が通院に同行する場合は、診察内容を口頭で確認しているが、ほとんどの通院は職員が対応している。隣県の医療機関に通う利用者もあり、通院日のシフトは職員を一人増やしてケア業務が円滑に運ぶよう配慮されている。また、介護老人保健施設から訪問看護が週1回あり、必要時には電話相談にも応じている。歯科医院も、不定期だが必要時には往診し治療を受けられる体制にある。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	隣接する介護老人保健施設の看護師に満天を兼務していただき、何かあればすぐに連絡をして、指示を仰いでいる。夜間でも急変時は連絡して指示をしていただいている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は、早めに情報提供をおこない、安心した環境になるように心掛けている。入退院の際、心配なことがある時は電話で情報交換している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	管理者が常にご家族と話し合いをして、職員にも説明し方針を共有し取り組んでいる。	過去に1回の看取りをした例はあるが、近年の事例は無い。入居時に看取りの指針を説明しており、嚥下機能の低下や入浴困難になった場合は、介護老人保健施設や特別養護老人ホームを勧めている。また、町立病院が終末期の受入れに協力的であることで、ぎりぎりまでグループホームでの生活を送ることもできるが、当グループホームでの看取りは体制的に難しいことを家族へ説明し、了解を得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	急変時マニュアルがいつでも見れる所に貼ってあり、急変時に対応できるようにしている。AED講習会などあれば参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	毎回、想定を変えながら避難訓練を実施している。地域の方々にも協力をお願いしており、訓練に参加していただいている。	ハザードマップ上では土砂・水害に該当していないが、強風による停電や火災、大雪への備えが必要となっている。年1回強風による停電が起きている。火災想定は年2回実施し、消防署及び地域の防災支援隊の協力を得られている。3日分の食料備蓄、発電機を備えている。避難場所として使用許可を得ている漁村センターについてはトイレや段差などを確認したところ、法人内の近接介護老人保健施設に避難した方が高齢の利用者にとっては安全かつ生活可能と判断している。また、非常ベルの設置と消防署への直通電話を備えている。	当施設避難先として使用許可を得ている漁村センターについては、利用者が避難した場合の設備の環境確認をすでに行っている。今後は、地域の支援団体との協力体制について覚書など書面化したものを交わすなど、実際の場面を想定した準備をさらに進めていくことが望ましい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	失礼な言葉掛けをしてプライドを傷つけないように注意しながら会話をおこなっている。入浴介助や排泄介助などには細心の注意を払いおこなっている。	理念を意識し、否定せず傾聴する姿勢を管理者から伝えている。研修において重要事項説明書の読み合わせを行い、日常において都度言葉遣いを職員間で周知確認している。誘導時の声掛けや声量、居室でのポータブルトイレ使用中の他者視線の配慮など、不安や不穏にならない声掛けを意識してケアに努めている。また、異性介助に抵抗感がある方へも同性で対応する配慮がされている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	外出して買い物に行き服を選んでいただいたり、食べたい物など利用者様に決めていただいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	日課の目安はあるが、その日の体調に合わせながら、好きな事ができるように支援している。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	ご本人が好きな洋服などをご家族に持って来ていただいたり、好みの物を一緒に選んだり、その人らしい身だしなみの支度が出来るように努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	茶碗洗いや茶碗拭き、テーブル拭きは利用者様に手伝ってもらっている。 月に一回、選択食の食事会などを開催したいと思っているが実施できていない。時々、外部発注でお弁当を取っており、いつもと違う雰囲気喜んで食事が出来るように感じる。	基本的には、隣接の法人内介護老人保健施設管理栄養士が献立を作成しており、汁物、副菜は隣接の同施設に取りに行く。当グループホームではご飯を炊いている。個々の嗜好、禁食、食形態のオーダーも可能で、月1回は麺類が提供される。イベント時は、グループホームで昼食を手作りする、又は地域の商店から弁当を購入する場合もある。また、おやつには誕生会のケーキ、うきうき団子やみみこもちといった郷土料理を、利用者と職員と一緒に作っている。利用者の半数が床のモップ掛け、茶碗拭き、お茶出し等の役割をもって参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	隣接する老健施設管理栄養士が作った献立なので、なるべく食べていただけるように食形態の変更やトロミを付け咽ずに食べられるようにしている。水分量が少ない方は好みを把握し、タイミング等見ながら提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	自分で口腔ケアが出来る利用者様には声掛けしておこなっていただき、難しい方には介助または半介助でおこない清潔保持に努めている。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	トイレの失敗が多い方には、排泄パターンを把握し時間で声掛けしている。出たいサインを見逃さないでトイレ誘導するなど、なるべく自分のできるよう支援している。	日中は、利用者全員がトイレを使用している。布パンツ使用が10人弱、他はリハビリパンツを使用、おむつ使用者はいない。夜間のポータブルトイレの使用は1号館、2号館共に2名ずついる。トイレの場所がわからない利用者は、落ち着いた様子を見逃さず誘導することで失敗なくトイレで排泄できている。日々の観察において、入居後に布パンツ、自立に改善した例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	水分を多く摂取できるように、ご本人の好みに合わせた飲み物の提供や、オリゴ糖や乳製品を摂取していただき、個々に応じた対応をしている。毎日、体操をするなど規則正しい生活が送れるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	定期的に入浴していただけるよう基本的には職員側の都合で入浴を実施しているが、利用者様の気が進まない日は、次の日や別の時間帯にずらして対応している。	入浴は3日に1回を基本とし、午前午後を通して3人程度が入れるように毎日湯張りをし用意している。入浴を嫌がる利用者には、時間や職員を変えて声を掛け促している。1号館に一般浴槽、2号館に機械浴槽があり身体状況に合わせて使い分け、入浴時間は制限せず、のぼせない程度にゆっくり入浴を楽しんでもらっている。異性介助を嫌う利用者には、同性職員が対応している。1対1で利用者とは会話する機会としても大事にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	一人ひとり体調なども違うので、疲れやすい方は横になる時間を多く取り、夜の眠りが浅い方は日中の活動を心掛け、ゆっくり休めるようにしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	病気や薬について確認している。薬が変更になった時は、体調の変化にも注意し、受診時には医師に報告をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	その方に合った役割を見つけ、日々の生活に張り合いが出るよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	買い物と一緒に出掛けたり、家に行きたいと訴えがある方は、ご家族に協力していただき、家やお墓参りに行ったりしている。	コロナ禍以降ドライブ外出は増えてきている。今年度は全体での外出は既に3度行った。行事は多く、春と秋に運動会も催される。日常的には、スーパーへの買い出しや洋服の購入などの個別対応も行っている。また、通院日に職員を一人多く配置することで、通院帰りに寄り道をして来られるようにといった管理者の配慮も行われている。介護老人保健施設裏にあるゴミステーションまで約100mの距離を、時々利用者と一緒にゴミ捨てに行くなど散歩を兼ねた手伝いも行われている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	お金の管理は施設がおこなっている。買い物等欲しい物、必要な物があれば、職員で購入している。希望がある時は利用者様と一緒に買い物に行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している。	ご本人がご家族に電話希望があれば、やり取りできるように支援している。遠方にご家族とは、オンラインで顔を見ながら話をさせていただいている。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム 満天 (2号館)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	ホールに季節の花を飾ったり、季節ごとの貼り絵をしたり工夫をして、居心地良く過ごせるようにしている。室温の調整や換気などもおこない、清潔にも気配りしている。	全床に床暖房が施されている。共用空間のリビングには黄色いソファ、テーブルとイス、テレビが置かれ、照明も明るい。エアコンや空気清浄機、加湿器が設置され、快適な共用の生活環境が保たれている。行事の写真や塗り絵、貼り絵、利用者作品の習字等が飾られている。トイレは1号館と2号館各3か所ずつ設けられており、風呂場は温泉マークで示す等工夫がされている。1号館と2号館をつなぐ連絡通路は、避難路として出口も設けられている。加えて1号館には小上がりと暖炉がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	居室はもちろん、個々の居場所を作り、常にそこにいられるように、また、利用者様同士が楽しめるような環境づくりに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	入居前にご本人が使い慣れた物を持ってきていただき、居室に置いたり、いつも身に着けていた衣類等、安心して過ごせるように工夫をしている。	居室には床暖房、ベッド、洗面台が完備されている。座席や居室に、表札としてネームプレートを掲げ、利用者が迷わないよう工夫がされている。利用者は、各々に位牌や衣装ケース、テレビ等を持ち込み、居心地よい空間が作られている。居室へのエアコン設置は、徐々に進められている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	トイレ、居室、風呂等、大きく分かりやすく表示し、分からない時には支援させていただいている。		